花と緑による環境美化活動の実践

特定非営利活動法人 渋川広域ものづくり協議会

世代を問わず交流があり、地域の環境保全活動が渋川市を活気づける。みんなの努力と笑顔から広まる、グリーンカーテンの輪。

「緑の渋川」実現のためにゴミ拾いを徹底して行う

ゴーヤの種をキッカケに、世代間の交流が深まる

●活動内容

メンバーを中心に、国道の中央分離帯にアジサイの一種であるアナベルの植栽を平成15年から続けている。ゴミ投棄が目立っていたが、花が咲く時期のポイ捨てが激減。周辺のゴミ拾い作業も定期的に実施している。開花後には刈り取る手間もかかるが、満開のアジサイはドライバーや観光客の心を癒す。

小野池あじさい公園では、開花の時期に無料で観光ガイドを担当し、「説明があると分かりやすい」と大好評。平成21年には10周年事業として、公園に隣接する里山に桜の苗木100本を植樹、桜の新名所を生み出す。

地球温暖化防止に役立つグリーンカーテンを広める運動も始めた。まず、ゴーヤの種を会員や公募で集まった企業・家庭に配布し苗まで育ててもらう。その育った苗を引き取って、学校や自治体・公共施設などへ届けて、グリーンカーテンを作ってもらう。

グリーンカーテンを作った小学生と一緒に、ゴーヤを収穫し、ジュースを作るのは楽しい。ゴーヤとコンニャクの豚汁風「ゴーコン料理」を考案、商標登録をしている。地域おこしに役立てようと、積極的にＰＲ中だ。

●事業を始めたきっかけ

ものづくり協議会を始める１年程前、定年退職者などのシニア仲間の集まりで、「渋川市はこのままでは元気が出ない。なんとかしなくては…」という話が出ていた。その時タイミング良く、当時の小渕首相の提言が元となり、ものづくり基盤技術振興基本法が施行された。「今の子どもたちは竹トンボも作れない。このままでは技術が育たず、日本の企業が国外へ出て行ってしまう。子どもの時から、ものづくりに興味をもってもらわなくては」という趣旨に、みんな大いに共感できた。この状況下で民間レベルでできる事は何であるかをシニア仲間が考えた結果、平成11年に同会を発足した。

子どもたちを対象に木工教室を開き、夏休みの宿題を手伝うなどの交流からスタート。当時は渋川地区高等職業訓練校の教室を借りたり、製材を手掛ける会員から材料をもらったり。試行錯誤で活動するうち、アナベル植栽をきっかけに、地域の美化・緑化運動といった活動が、会の主軸となってきた。ゴーヤ料理などを通して、地元の子どもたちとの交流を積極的に続けている。

アジサイの良さを知ってもらうため、ガイドに余念がない

さまざまな活動で、地域に交流の輪ができている

●工夫している点・特長

国道17号線沿いに花を植えたりする際には、トイレや駐車場に困るが、周辺の企業に声をかけたところ、快く協力してもらえた。また、小学校や幼稚園、公共施設などへのゴーヤ苗配布に関しても、元学校関係者の会員による協力のもと意欲的に進めている。

これまで長い社会生活を営んできたシニアならではのネットワークが強みとなり、地元の施設や企業とのつながりをフルに活かしながら、活動を広げている。

ゴーヤによるグリーンカーテン運動は、「ゴーコン料理」という面白い副産物を生んだ。群馬県は、ゴーヤの収穫量が東日本では最も多い。渋川地域のコンニャクと一緒に料理する「ゴーコン料理」は、地域イベントでも振る舞い、浸透を図っている。ゴーコンおやき・ゴーコンへそまんじゅうなど、数多くの料理を開発し、会では料理教室も開催している。

花植えの作業中等はみんな真剣でも、時間がきたら無理をせずに切り上げる。あくまでも負担にならず、参加しやすい楽しい会であることを基本としている。

〈やりがい・楽しみ〉

花の手入れや草むしりなどは、高齢者の良い運動となる。「来週は○○をする予定」と、スケジュール確認を各自がする事は、脳の活性化にもつながる。自分たちが植えた花が喜ばれ、開発したゴーコン料理が地域活性化に役立つのがうれしい。やったことに対して手応えが返ってくるので、やりがいを感じる。子どもたちとゴーヤジュースを一緒に作って飲んでいると、気持ちも若返る。「おいしかった！」の笑顔が一番のご褒美だ。

基礎データ

☎0279-20-1400
特定非営利活動法人
渋川広域ものづくり協議会

事業開始時期／
平成11年

主な活動／
花と緑による
環境美化活動

人数・年齢／
企業団体会員27社
個人会員83名
60～80代